

教授就任に際して

## ご挨拶

Benoît Collins コリンズ ブノワ

2021年4月に教授に昇任致しましたことに伴い、ご挨拶させていただきます。

私はフランスで生まれ育ち、1996年にパリ高等師範学校 (Ecole Normale Supérieure – ENS) に入学しました。そして2003年にパリ6大学とENSで数学の博士号を取得しました。その後、京都大学で3年間ポストドクを務めてからアカデミックに就職しました (リヨンでCNRSとその後、オタワ大学)。2014年4月より京大数学教室で准教授になりました。

専門分野ですが、学位を取得してから18年経っても、十分に明確には記述できません。日本とカナダで解析者として認識されている気がしますが、元々は確率論者として訓練を受けました。私は主にランダム行列について研究しています。また、ランダム行列と自由確率、数理物理学、量子群、表現論、量子情報理論との関係に興味を持っています。だいぶ前の話になりますが、ENSでは2年生から専門を選択をする為、担当教員に面接を受けて志望分野を議論する決まりがありました。私の場合、ENSの1年生時に確率論と表現論の両方に大変興味を覚えていたので、担当教員にそう伝えると、それは珍しい組み合わせだと言われ、非可換確率を勉強することを勧められました。そして博士課程の指導教官を紹介してもらいました。

また、日本への留学にも興味がありました。東大とENSとの交流プログラムの恩恵を受けて、PhDを始める前に東大で半年間、作用素環論の基本を勉強しに行きました。昔も今も、旅行は好きです。新しい国に住んだり滞在すると、新しい研究スタイルやインスピレーションを得られる印象があり、数学の研究は本質的に国境と文化を越えたものであると感じています。個人的に孤独な研究はあまりできない性格ですので、別のバックグラウンド、専門、文化などを持つ方との共同研究が成功したときの満足度は大変高いです。私にとって、京都大学は日本の数学者が会う場所ですし、国際の数学者と国内学者が合流する場所でもあるので、刺激的です。京都に着いた後、日本と外国の数学者数人と素晴らしい出会いをし、鮮やかなコラボレーションがたくさん生まれました。年を重ねるにつれ、若い数学者を育てる機会はますます増えています。これは心から願っている大きな責任と名誉です。京都大学はモチベーションの高い若い数学者の素晴らしい源です。

教授に昇進するという事は、大きな責任を担うことと認識しています。信頼していただき、深く感謝しております。実は、私は学問的に日本語を学んだことがないので、言語能力はギャップだらけです。教授の先輩方と十分に同じ仕事をできるかどうか、不安は常にありますが、その中で去年のコロナ災害の厳しい時期は、私の言語を上達させるには良い機会でした。新しくなる仕事の内容についてまだ分からないことが沢山ありますが、精一杯努めたいと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。